

## 蜜の大地 田中拓也

小紋潤歌集『蜜の大地』（ながらみ書房）が上梓された。「待望」という言葉がこれほどびびったりの歌集はないと思う。

私が小紋潤氏と最初に出会ったのは「心の花」に入会して間もない一九九〇年前後であつたと記憶している。当時、「心の花」には十代・二十代の若者が毎月のように入会しており、東京歌会や若手勉強会などを通して切磋琢磨をしていた。その頃の私たちの一世代上の先輩が黒岩剛仁・谷岡亜紀・大野道夫・俵万智氏たちであり、その一世代上の先輩が小紋潤氏たちの世代であつた。

当時、小紋氏は雁書館の編集者・装丁家として活躍しており、後輩に様々なことを教えてくれる貴重な先輩の一人であつた。

- ・ 銀河系、その創まりを思ふときわが十代の孤り晶しも
- ・ 劫初には優しき風とするべなき明日のために青きシャツ着る
- ・ 一途なる思ひを持ちて郁子の咲く五月の丘に一人遊びき

初期の作品より抄出した。瑞々しく、繊細で、力強い作品世界である。「銀河系」のはじまりというスケールの大きさと自身十代の孤独感を重ねあわせた一首目。「明日のために青きシャツ着る」という青春の一回性を詠んだ二首目。「一途なる思ひ」に心を満たした一瞬の自身を詠んだ三首目。これらの繊細な「男歌」の系譜は「心の花」の男性歌人に脈々と引き継がれているように

思う。

- ・ 叶はざりしことのみ多し万緑の彼方に若き白雲湧きぬ
- ・ 娶ることなく逝きしかば南天にうつせみの赤星はひかり
- ・ 滅ぶとも流れゆくともよし春に花飾る吾も飾らるる汝も

小紋氏は寡作の歌人である。だからこそ、『心の花』誌上に作品が掲載されたときには強い印象が残ることが多かった。今回、歌集単位で作品を読んだときに、最も印象に残ったのは「挽歌」であつた。友の死を万感の思いを込めて詠んだ作品を抄出した。そこには、現代短歌史とは全く異なる詩情が流れていることがはつきりとわかる。万葉の時代、短歌の根底にあつたのは「挽歌」と「相聞」であつたという。「悲しみ」と「愛」。この感情こそが、人間の根底をなすものであろう。

- ・ 生きて死ぬその理に沿ふごとくいま草木は黄葉の季節
  - ・ ながらへてあるのみならず秋草の滅びの前の芒はなびく
  - ・ 曇天の深きより来る光ありしづかに冒されてゆく雲があり
- これらの自然詠もあきらかに「挽歌」の一種といえるだろう。森羅万象を見つめるときに、作者の眼には「死」というものが常に見えていたのだろう。「死」を見つめる鋭い感性は、作者の人生に深い陰影を与えたのであろう。歌集の作品群を読み返すたびに、そんなことを強く感じている。

- ・ 肩車よろこぶ声は父よりも高きところに麒麟を仰ぐ
  - ・ クレヨンに描かれてゆく麒麟なりさうだ象よりずつと喬いぞ
- わが子を詠んだ二首を抄出した。「父」と「子」の一瞬の時間を詠んだ心にしみる秀歌と思う。『蜜の大地』を「心の花」の後輩の一人として、大切な贈り物として受け止めたい。